

『アンパンマンという生き方』

西脇市病院事業管理者・病院長 岩井正秀

先日、高校卒業50周年の大同窓会が開かれることになり、久しぶりに故郷の高知に帰ってきた。会は多くの同級生が集い大いに盛り上がった。高知市内の様子も随分と変わっていたが、特に新たに目についたのがアンパンマンである。列車や路面電車の車体のみならず、色々な所にイラストが描かれ、モニュメントがあり、店ではアンパンマンのコーナーをよく見かけた。作者のやなせたかしが高知出身ということもあると思うが、とても目立つ。来年のNHKの朝ドラも、やなせ夫妻がモデルとなるらしい。今年の『らんまん』の牧野富太郎に続き、同郷の尊敬する人物がドラマのモデルとなるのは嬉しく誇らしいものだ。

以前から、高知に限らず、小さな子供たちにアンパンマンの人気は凄まじいものがある。何が子供たちを強く引き付けるのだろう。無論、優れた画力によるキャラクターの多様さも素晴らしいが、さらに作者は主人公に、決してぶれることのない正義と、それに裏打ちされた大きな優しさを持たせている。それは作者自身の飢餓体験から来るもので、たとえ自分が少しぐらい苦しくても、飢えた人に食べ物を与えることは、それは、それだけは絶対的な正義だと彼は語るのだから。

何年前か、地域医療に関する講演会で、ある先生が、へき地や地方の医療に必要なのは、ウルトラマンではなくアンパンマンだという話をしていた。圧倒的に優れた能力を持っているが、3分間戦って去っていくウルトラマンよりも、弱点があっても常に地域にいて、多くの仲間と助け合っていくアンパンマンの方が、その土地の医療にとっては強く大きな力になるというのだ。なるほど、うまく例えるものだと感心したことを覚えている。

しかるに、昨今の働き方改革である。毎日休むことなく、みんなのために見回りをするアンパンマンは、すぐに新しい規則に抵触してしまうだろう。ましてや飢えた人のために自分の顔をちぎって与えるなどというのは、もっての外だと糾弾されるに相違ない。アンパンマンも色々悩むところだ。しかし、しかしである。たとえ人の働き方は改革され規制されても、その生き方に関しては誰も改革や規制をすることはできない。人として最も大切なのは生き方の選択であり、生きていく姿勢であるからだ。「君たちはどう生きるか」である。

医療の現場では様々なことが起こる。そして、そこでは理不尽なことは決して生じないようにしなくてはならない。しかしながら、働く人間も様々であり物事の受け取り方も異なる。そのため重要なのは、個々人に適した働き方を模索することであり、それは必ずしも画一的なものではないはずだ。今の若い人達も個性に富んでおり、それを十把一絡げに「Z世代」などと呼ぶのは極めて失礼な話である。働き方はあくまでも生き方の一部であり、断じてそれを逆転させてはならない。働き方改革の影響は多大ではあるが、アンパンマンの正義が揺るぐことがないのと同じように、私達は何としても地域医療を守っていかなくてはならないのである。

もうすぐ2歳になる孫娘に土産の人形を渡すと、小さく「アンパンマン！」と叫んで笑顔になる。ねえ、君がいつまでもアンパンマンの優しさを持っていてくれることを、じいじは心から願っているからね。